このたび
男装女子と
寮でルームメイト
になりました
舞麗辞
挿絵／しまちよ
立ち読み版

プロローグ　ふたりはともだち!?　006
第一話　男装女子と相部屋ならばイタズラしない理由(わけ)がない！　034
第二話　歩、連れ去られる　072
第三話　夏だ！　祭りだ!!　ふんどしだっ!?　138
第四話　ブルマ狂想！　178
第五話　サンタが部屋にやって来て　216
エピローグ　ふたりはこいびと!!　252

登場人物紹介

Characters

神崎歩（かんざきあゆみ）

訳あって男子校にいる美少年？　悠麻とは親友を誼めあう、寮でのルームメイト。

篠原悠麻（しのはらゆうま）

歩に恋しちゃった健全少年。自分は女性好きのノーマルだと信じていたものの…!?

ここのところ悠麻は軽い不眠症に陥っていた。原因は言うまでもない、二段ベッドの下段で眠るルームメイトだ。

なにせ二段ベッドの板一枚挟んで想いを寄せている女の子が寝ているのだ。すやすやと健やかな乙女の寝息は耳に優しいが、健全な男子a・k・a（またの名を）・飢えた狼であるところの悠麻には子守唄どころか悪魔の誘惑に他ならない。

事実、性欲に突き動かされて黒い衝動が芽生えることもしょっちゅう。なにしろちょっと理性を横に置いておけば童貞卒業も夢ではない状況である。しかも自分は彼女の重大な秘密まで握っている。それをネタに脅迫すればあるいは――。

「って何考えてんだ俺は…いかんいかん」

ぶんぶか頭を振りながら邪念を追い払い、二段ベッドの上から身を乗り出して下段の方を覗く。

「おーおー、気持ちよさそうな顔しちゃって」

そこには寝不足で目の下にクマを作っている悠麻とは対照的に、健やかな寝顔ですぅすぅと幸せそうな寝息を立てる歩の姿があった。すぐそばにケダモノがいるとは露知らず、男装の眠り姫は母親のお腹の中の胎児のように身体を小さく丸めながら絶賛熟睡中のご様子だ。

（ったく、ヒトの気も知らないで――）

無防備な女の子の寝顔は見ていてとても愛くるしいが、寝不足で苛立ち気味の今は可愛

さあまってなんとやら。大声でも出してびっくりさせてやろうか、などと悠麻が子供じみたことを考えていると。

「うぅ…んぅっ……」

小さな呻きを漏らし歩が寝返りを打った。胴体に巻き込まれたタオルケットが盛大に捲れ上がり、背中から太腿までが露わになる。

（うおっ、ケツがっ…歩のケツがぁぁ……!!）

無論パジャマを着てはいるものの、身体を丸めているためプリンとしたヒップラインがハッキリと見て取れる。彼女の体躯からするといささか育ちすぎの気もあるたっぷりとした桃谷間から饅頭みたいにぷくっとした股間の盛り上がりまでが手に取るように見えた。

「そっ、そろそろ起こしてやらねばなるまいて」

きらーん☆

悪い顔になった悠麻は目の中にお星様を浮かべるや、しゃかしゃかしゃかっと壁を這う黒い悪魔の如き素早さで梯子（はしご）を駆け降り熟睡少女の脇へと陣取る。

「おーい歩ー？　もうすぐ起きる時間だぞー？」

まるでそちらに耳があるかのように、突き出された桃尻に向かって声をかけてみる――が、返事はない。

（まあこの程度で起きないのは計算通りですけどね……ムフフ♪）

ご存知の通り、歩は超が付くほどのねぼすけなのだ。だから今の声かけは彼女を起こす

ためではなく、むしろ彼女が熟睡しているのを今一度確認するためだった。
「ほらほら歩さん？　起きましょうよぉ、早く起きないとイタズラしちゃいますよー？」
寝起きドッキリのレポーターよろしくヒソヒソ声で言いながら、悠麻は試しに目の前の片桃を人差し指でつんっ、とつついてみる。
ぽよんっ♥
えもいわれぬ気持ちいい感触。突かれた尻肉はスプーンで突いたプリンみたいに弾力豊かに揺れ踊る。
（うおっプリプリ……しかし起きる気配はないな。も少しくらいはへーき、かな……）
ファーストコンタクトで自信を持った悠麻は、大胆にも掌を広げ片尻をそっと鷲掴む。
むにぃぃぃっ……歩の桃房は肉質が非常に柔らかく、かつ寝汗のためかじっとりと湿り気を帯びておりまるでつきたての餅みたいだ。
（すっ…素薔薇（すばら）しい……二、三日は手を洗わないでおこう）
それにつけても歩嬢、これだけ大胆な痴漢行為にも一向に目を覚ます様子がない。それをいいことに悠麻はしばしの間目の前に実った巨桃を好き放題に弄ぶことにした。
なでなで、むにむに……左右の尻山を渡り歩いてその逆ハート型の丸みを愛でるように撫で回しつつ、時折桃溝に指を滑り込ませそこに籠もった熱気を楽しむ。
（うはっ歩のお尻、ムチムチしてて触り心地よすぎ……♥）
肉付きのよさといい形のよさといいまさに美尻、このままずっと触っていたいと思わせ

る若さ溢れる桃尻だ。
しかし人間の欲望というのは歯止めの利かないもの。臀部を堪能した悠麻は当然のように、更なる女体の神秘に迫ってみたいという衝動に駆られる。
（でもこれ以上はさすがに魔が差した、じゃ済まないよなぁ）
今みたいに軽くお尻を触るくらいなら、万一途中で彼女が目を覚ましても笑ってごまかせる気がした。そりゃ少しは怒るかもだがなにせ歩にとって自分は〝女友達〟、女子同士でおっぱい揉んだりしてじゃれあってるのと同じノリだ。
とはいえ服を脱がせたら、それはさすがにアウトな気がした。
（本日のスーパーイタズラタイムはここまでか…ならせめてもう少しだけこのお尻を）
今晩の夜のおかずに、とその温もりと弾力を掌に覚えこませるようにむにむにと桃尻を揉みしだいていた悠麻であったが。
ヴィイイイッッ!!
そんな彼を咎めるが如く、突如ベッド上で不快な機械音が鳴り響いた。
歩が目覚まし代わりにセットしておいたケータイアラームが鳴り始めたのだ。
びくぅぅぅっっっ!?
悠麻は驚きのあまり身を跳ねさせ、超人的ジャンプで梯子すら使わず二段ベッドの上段へ飛び乗るやそのまま狸寝入り。
「すぴー…すぴー……すぴぃ？」

それからおよそ一分少々。わざとらしい寝息を立てて下の様子を窺うも、歩はいつまで経っても一向に起きる気配がなくただただケータイバイブの振動音だけが鳴り響き続ける。

（そういえばいつもはバイブと一緒に着うたが流れてたよな……）

しかし今、下のベッドから聞こえてくるのはすやすやという歩の寝息とバイブの機械音だけ。何かの拍子でマナーモード優先に切り替わってしまっているのかもしれない。

バイブ音程度では彼女を深い眠りから呼び覚ますこともできず、歩のケータイは枕元でむなしく震えるばかりだ。

「うう…んっ…ぁ」

それでもバイブ音は少々不快らしく、男装少女は再び寝返りを打つ。プリプリの豊臀は向こうを向いてしまったものの、代わりに愛らしい寝顔と軽くはだけたパジャマの胸元がコンニチワ。睡眠時は寝苦しいらしく、やはり例によってサラシ代わりの包帯は巻かれていない。万一誰かが入ってきたら一発で男装がバレる危険極まりない姿だ。

（お、おっぱい……くっ、さきっちょ見えそうで見えないな……）

誘い込まれるように悠麻は再び梯子を駆け降りる。視線を吸い込む男装少女の胸元では寝汗が乳谷間に集まって、小さな湖を形成していた。

「……そうだ、暑くて寝苦しそうだし胸元をはだけさせてあげよう（棒読み）」

下手な言い訳で自分の良心を納得させるや、悠麻はそっと歩に近づいてパジャマの胸に手を伸ばす。一つ、二つとボタンを外してゆけば普段サラシに巻かれているせいかおおよ

そ日焼けとは無縁なミルク色の素肌が覗いた。
（うお…こっ、これは……!!）
汗で乳峰に張りついた布地を桃の皮のようにゆっくりと引き剥がしてゆくと、乳白色の肉球の先端で桜色に色づく粘膜部が見えた。
（おっぱい――あゆみのおっぱいいいいっっ!!）
がばあっ!!
乳輪の端を視界に捉えた瞬間、悠麻は衝動的にパジャマの胸元を左右にひん剥いていた。
ぷりゅんっ！　衝撃に二つの乳釣鐘は激しく打ち合い、ふるふると揺れ踊る。
（うおっ、勢いで剥いてしまったが……しかし歩さん、これでも起きないですかアナタは）
これだけの破廉恥行為が行われているにもかかわらず、男装少女は夢の中。時折口元を歪めてむにゃむにゃ何かを言っているがその瞳は閉ざされたままだ。
（こ…これが女の子のおっぱい……うわー…歩のヤツ思ってたより巨乳だな）
ホモだと勘違いされて以来彼女の胸の膨らみは何度も目にはしているものの、こうやって息がかかるほどの至近距離でじっくりと見るのは初めてだ。
仰向けの体勢にもかかわらず、若さ溢れる歩の乳房は綺麗なお椀型を維持していた。白磁のように艶やかな乳肌はじっとりと汗ばんでおりいやに艶（なま）めかしい。乳輪はあまり大きくなくて百円玉くらい。色は春先学園の並木道で咲いていた桜の花びらみたいに淡く美麗な色をしていた。乳首も豆粒くらいで非常に可愛らしい。

こんな美味しそうな禁断の果実を前に、健全男子が我慢などできようはずもない。悠麻は興奮で震える指をそっと伸ばし、おっかなびっくり桜色の先端に触れてみる。

くにっ、とグミみたいな感触。そのままゆっくりと押し込んでみると、指先は容易にずぶずぶと乳肉深くへ埋没してゆく。

（うあ…おっぱいの中ってすごく、あったかやらかい……!!）

埋まったのは人差し指の第一関節だけだがまるで右手全体が蕩けるかのような甘美な感触だ。指の腹で潰れた乳首からはとくん、とくんと脈打つ鼓動まではっきりと感じられた。

生々しい感触に興奮しつつそのままくりくりと指先を蠢(うごめ)かし乳首を刺激すると、

「ん…あっ……むぅぅ…ふぁ」

それまで健やかそのものだった歩の寝息が心なしか艶めかしい吐息に変わる。

枕元ではマナーモードの携帯が未だむなしく振動し続けていた。

（はっ、コレで刺激したらもっとエッチな声を出すのでは……？）

好奇心に駆られた悠麻は歩のケータイをそっと手にすると、軽く勃起していた乳頭へとその角を押し当ててみた。

ぶぶぶ…乳先に触れた途端、振動音が重くなる。

「んっ…ふぁっ……あんっ♥」

瞬間、悠麻が期待していたものを遥かに上回る、可愛くも卑猥な艶声が唇を割って出た。

同時に乳突起も目に見えてむくむくと充血してゆく。

（すごい、歩の乳首っ…ボッキしてる……バイブの刺激に感じてるんだ!!）

ツンッと尖った乳頭を前に悠麻はごくりと生唾を呑む。

（下の方にも当ててみたりしたら……もっとすごい声出すのかな――？）

胸もお尻も気になるが、やはり男子にとってこの世で一番の神秘の場所といえば女子の股間以外にない。もう一方の乳首も硬くさせた後、興奮した悠麻はそのイタズラの手を少女の下半身へと向ける。

胸への刺激のせいで歩は身体を横にして丸くなってしまった。美味しそうなヒップは壁側に向いているものの、胎児みたいに身体を縮こめているためこのままでも手を伸ばせば股間に触れられそうだ。

（でもこれ…目を覚ましたらマジで冗談じゃ済まないだろうなぁ……）

などと思いつつもここまで来たら引くことなどできはしない。

（そ、そうだっ無防備すぎる歩が悪いんだぞ――ええいっ、ヤってやるぜ!!）

申し訳程度の逡巡で一線を越える決意をした（性欲に負けた、とも言う）悠麻は、手にしたケータイで眠り姫のパジャマ越しでもぷっくりと柔らかそうな股間を強襲する。

むにゅうぃぃぃ――…!!

肉土手の感触は見た目以上に柔らかく、プラスチックの通信機器はずぶずぶと飲み込まれてしまう。力の加減を間違えた悠麻は大いに焦るが、この期に及んで歩はまだ起きない。

（もしかして歩のヤツ、本当は起きていて寝たふりしてるんじゃなかろーな……？）

そう勘ぐりたくなるレベルだが、あの恥ずかしがり屋な歩がここまでされて寝たふりなどしているはずもないから本気で熟睡中なのだろう。それが証拠に男装少女はなんとも幸せそうな、少し呆けたような表情を浮かべすやすやと寝息を立て続けていた。

しかし同時に、思春期な女の子のカラダは与えられる刺激にしっかりと反応していた。

（おい、ちょっと待て……これっ、歩のヤツ…腰、振ってる……!?）

最初は見間違いかと思った。あんまりいやらしい目で見ているせいでただの身じろぎまで卑猥な動きに見えているのでは、と。

だが歩は確かに腰を前後に揺さぶっていた。空腰、というヤツだろうか。細身なくせにそこだけは肉付きのよい牝腰をくいっくいっと前に迫り出して自ずからケータイバイブの振動をより激しく味わおうとしていたのだ。

（気持ちいいんだ歩……俺の愛撫で感じてるんだ――!!）

潔癖な少女の内側に潜む浅ましい牝の痴態に目を奪われていると、

「うぅ…んっ」

ぐいっ！

「え…わあぁっ!?」

少年の手から不意にケータイがひったくられた。歩が自らの股間へと押し当てられていたそれを奪い取ったのだ。

（ばっ、バレた――――ッッッ!?）

とうとう目を覚ました――これから始まるであろう修羅場に言葉を失い固まる悠麻。

しかし。

「んあ……むにゃ…んっ♥」

その口元からは相変わらず艶っぽい声がこぼれ出る。どうやら歩はまだ目を覚ましていないらしい。

だが同時に少女は眠ったまま、悠麻から奪い取ったケータイを自分の股座（またぐら）に押し当てていた。

（え…これって……いや、うそ……だろ？）

それはネットの動画やエロ漫画の中では見慣れた光景だった。とはいえ、純情そうな歩とは到底イメージが結びつかない行為でもある。

目の錯覚だろうか？　確かに最近は歩を始終エロい目でしか見ていないが……それでもやっぱり目の前で繰り広げられているこの行為は、どう見ても――。

（おっ、オナニー…だよな……？　歩のヤツ……オナニーしてる…のか!?）

ケータイバイブを自らの陰部へと宛がい刺激するその様子はやはり、誰がどう見ても女の子の一人遊びとしか思えなかった。

歩は振動を続けるケータイ、その角を丁度恥丘のあたりにぐいぐいと押しつけていた。悠麻がイタズラしていたときなんかよりよっぽど大胆に、乱暴に。パジャマ越しの陰裂をくじってみせる男装少女。

「んっ…ふぁっ、あっ、あ……♥」
そんな激しい刺激に合わせて艶めかしい声が口を突いて出る。
（うあ…あ、あんな激しくっ……!?）
唐突に始まった想い人のオナニーショウに、悠麻はただ呆然と立ちすくんでそれを見守るしかできない。そんな少年をまるで挑発するかのように、少女の自慰はヒートアップ。既に携帯のアラームは止まり振動もやんでいたが、歩はそんなことお構いなしにケータイをぐりぐりと股に押し当てて楽しんでいた。
（ほ、本当に女の子もオナニーとかするんだぁ……）
普段からケータイを使って自慰をしているに違いない、歩の指使いは明らかに手慣れた様子だ。男装の眠り姫はしばし股座をなぞるようにケータイの角を前後させていたが、やがてくりくりと小さく弧を描くような動きに変化、角を恥丘の一箇所に押し当てて刺激を繰り返す。
多分そこに歩の一番キモチイイ場所があるのだろう。
（うわ…エロすぎ……!?）
パジャマ代わりのジャージのズボンをパンパンに張り詰めさせつつ、更に凝視しようと悠麻は身を乗り出す。
するとそんな観客の期待に応えようとでもいうように、男装少女は空いている手を自らの胸元へと持っていくと裸の乳峰をいささか乱暴に揉み始めた。

意地悪を言われた男装少女はもはや反論さえできずに拗ねるように下唇をかみ締めて、喉の奥で呻き声を漏らすばかりだ。釣り目でもって恨めしげに悠麻を睨みつけてくるものの、その瞳は潤みきっており欲情の色をまるで隠せていない。

そんな可愛いリアクションを楽しみながら、悠麻の興味は少女の胸元から下半身へと移行する。改めてその華奢なウエストに驚きながらバックルを外して通し穴からベルトを引き抜くと、ホックを外して更にチャックを下ろしてゆく。歩にお尻を上げてもらい、共同作業で下着もろともズボンをその美脚から脱がせれば、少女はもう靴下以外何も身につけていない。

「あっ…あんまり見るな……すっごく、恥ずかしいんだぞ」

最後の護りを奪われた歩はすぐさま内股になり、更に両手で晒されたばかりの股間を覆ってしまう。

「ほら、手が邪魔だぞ」

言いながら悠麻は少女の股間へと飛びつき掌を引き剥がしにかかるが、今度は本気で抵抗しているらしく簡単には退けてくれない。

「自分から誘っておいておあずけはないだろ」

「だって…そんな顔っ…近づけるなんて…恥ずかしい……!!」

歩は掌にギュッと力を込めて頑なにそこを護ろうとする。

「恥ずかしがることないだろ、今から――するんだし」

「そうだけど……で、でもっ、その…ニオイとか……シャワーも、浴びてないのに……」
その台詞に悠麻はようやくなるほど、と思う。彼女は股間の――おそらくおしっこの――匂いを嗅がれてしまうのを恥ずかしがっているらしい。
「でも見たい。歩のアソコ」
そう言った悠麻は先ほどまでの力任せから一転、少女の手の甲へ何度もキスをして入場を請う。
「ううっ…こんなところ、そんなに見たいのか⁉」
退く様子のない少年に、男装少女は信じられないといった顔で確認してくる。
「見たい！」
悠麻は当然そう即答。
「くっ…臭いとか言ったら殺すからな⁉」
「うん」
「グロいとか言っても殺す‼」
「うん――他に条件は？」
殺す、などと物騒なことを口にしながら、歩はどんどん泣きそうな顔になってゆく。そんな彼女の様子が可愛くて、もっと条件はないのかと身を乗り出す悠麻。
「えっ他に⁉　えっと、他には、他にはぁ……うう～っ…見たけりゃ好きにしろっ‼」
これ以上何を言ってもやっても恥辱は避けられないと悟ったらしい。胸を晒すとき同様

捨て鉢になったように声を荒らげた歩は両目をギュッと瞑りながらも、ようやく秘所からその掌を退けてくれた。

「……すっごく綺麗」

生まれて初めて生の女性器を目の当たりにした悠麻は、思わずそう漏らす。

歩のそこはまるで果物のようだった。熟れた果実に亀裂が入るように、少女の股座には一条のクレヴァスが走っていた。

色はいちごミルクを思わせる柔らかい薄ピンクで、左右の陰唇は完全なシンメトリー。肉洞を囲う薄い肉襞は透き通るような透明感があり、まるで飴細工かガラス細工のような芸術的な美しさだ。

歩が気にかけていたニオイだって全然気にならない。確かにほのかに尿の甘い匂いは感じられたが今は夕方、シャワーも浴びてない以上しょうがないこと。それにしたって、秘唇から立ち上るはちみつレモンのように甘酸っぱい女の子の匂いに完全に打ち消されていた。

「歩のここ…すごく甘くていい匂いがする」

愛しい人の秘めた匂いをより深く知りたくて、悠麻はクンクンと犬みたいに鼻を鳴らす。

「やだっ、そんな鼻近づけて嗅ぐなんてっ!!」

いやいやをするようにかぶりを振ってはにかむも、先ほどまでの頑なさはない。

（これが噂に聞く〝いやよいやよも好きの内〟というアレなのかな……）

だとしたらもっと大胆に打って出るのもアリかもしれない。

「舐めるよ」

許可を貰ってからでは間違いなく拒否されると考え、歩の返事を待たずに悠麻は目の前で咲き綻ぶ処女百合へと口づけをした。

「ちゅっ！　じゅっ、じゅるっ…ずちゅっ……ずぞぞっぢゅちゅうぅぅ……!!」

「ひゃあっ!?　なにしてんだよゆーまっ、きたないっそこは汚いんだぞっ!?」

素っ頓狂な声を上げながら男装少女は自分の股座に潜り込んだ後頭部をぽかぽかと殴るが、悠麻はそれに構わずひたすらにそこへ口づけし、舌を這わせる。

（うわっ女の子のあそこってめちゃくちゃ柔らかいっ……しかもなんかホント甘いし……っていうか歩のここっ、美味しすぎっ――!!）

唇で触れた彼女の秘部は炙ったマシュマロみたいに柔らかく、見た目と同じく果物のように瑞々しく甘い。陰裂に舌を差し入れてみるとねっとりと濃厚な蜜が噴きこぼれ、会陰から桃谷間まで透明な蜜液を滴らせた。同時に膣内は火を噴くくらい熱く、一舐めするたび舌が火傷してしまいそうなほどだった。

「あっ、ひっんぅっぅ……そんなっ深く舌ぁっ、ねじこんじゃ……あぁぁぉっっ!?」

ぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃ……砂漠を散々放浪した野犬がようやくオアシスを見つけたように、悠麻は舌全体でべっとりと、同時に粘膜をこそぐ勢いで激しく蜜を舐め上げる。それでも少女の愛液は後から後から溢れ出しとても舐めきれない。悠麻は肉裂の中に舌を

差し入れて、蜜を吐き出す泉から直接それを啜りだす。
じゅるっ、ずちゅっじゅるちじゅじゅじゅ――ッッ!!
「ひゃぅあああっっ!! あっ、あんっ、んひゃあああんっっ!!」
舌で舐め上げるごとに歩は身体全体をビクビクと暴れさせ、あられもない嬌声を部屋中に響かせる。数ヶ月の間寝食を共にしてきた悠麻も聞いたことのない声だ。
「ちょっと歩っ…声が大きい!!」
しかし喜んでばかりもいられない。この寮の壁は防音効果が高いから大丈夫だとは思うが、それでも心配になってしまうくらい歩の喘ぎは大きかったのだ。
「ひゃうぅ…そっ、んなこと…言ったってぇっ…仕方っない、だろ……気持ち、いいんだからぁっ」
快感に少し緩んだ表情で、逆ギレ気味にそう反論する少女。
「さっきまで見せるのも恥ずかしがってたくせに――やっぱり歩はエッチだな♪」
はしたない彼女へのお仕置き、とばかりに悠麻は陰核へちゅうっと吸いついた。
「ひんっ!! …このっ、ゆっ…ゆーまだってココぉ、こんな…大きくしてるくせにっ」
照れ隠し代わりなのか、歩は脚で少年の股間をぐにっと押しやる。彼女の言葉通り、彼の股間はズボンの上からでもはっきりとわかるほどビンビンに張り詰めていた。
「そりゃ歩があんまエロい声とか出すからだろ」
すかさずそう切り返す悠麻だが、欲望の象徴を女子に見咎められるのはやはり恥ずかし

い。彼女の視線から逃げるように腰を退こうとするものの、
「なんだゆーま、ヒトにはここまでさせといて逃げる気かぁっ…お前も見せてみろっ!!」
自分だけ恥をかかされてなるものか、とばかりに歩は少年に飛びかかり、ベッドへと押し倒す。
「わぁっ、歩きゅんに犯されるっ!?」
「ばかっ、ワケわかんないこと言うなっ！」
じゃれあうように絡み合い冗談めかして言いながらも、悠麻は結局歩のするがままにされる。確かに見られるのは恥ずかしいが、それ以上に女の子にペニスを触ってもらえるかもという好奇心の方が大きかった。
「ほぉら捕まえた――ふふん、覚悟しろよゆーまっ♪」
仰向けに押し倒した少年の上に馬乗りになった歩は、先ほど自分がされたのを反復するみたいに悠麻のベルトを外しズボンとトランクスを脱がせてゆく。まだシーツに残る彼女の温もりが、裸の尻に心地よい。
そうして歩の指がトランクスのゴムを引っ張り下ろした瞬間、既に硬く大きく勃起していた悠麻のペニスはびょんっ！　とカエルのおもちゃみたいに勢いよく飛び跳ねた。
「っ!?　…これがおちん…ちん……すごい、元気なんだな……」
生まれて初めて見る男性器を前に、歩は圧倒されているようだ。口元を押さえながら、その目はしっかりと見開かれ目の前の男根を凝視している。

（うわ、歩が見てる…俺のを、あんな熱っぽい目で……）
勃起へと浴びせられる熱視線に恥ずかしさ以上に欲情を刺激されて、悠麻のペニスがぴくんと跳ねた。
「わっ、なんか生きてるみたい、これ……なあ、触ってみても…いい、かな？」
やがて歩は顔を真っ赤にしながらも未知の器官への興味に突き動かされ、彼女らしからぬ積極性でそう聞いてきた。
「う、うん！　ていうかむしろこっちからお願いしたいくらいだし…あはは」
歩の言葉に即答してから、自分のあまりの節操のなさに思わず照れ笑いを浮かべる悠麻。しかしそれも仕方のないことで、外気に晒された剛直は刺激を与えられずにおあずけ状態。その砲身をビクビクと跳ねさせて飢えを表明していた。
「そうなんだ…じゃあ触る、ぞ――わっ、熱い⁉　それに…すごい、硬いんだ」
勃起に触れた男装少女はその未知の感触に驚いたように目を丸くしながら、暗闇で物を探るようにペニス全体をさわさわと撫で回す。
「っ…ちょっ、そんな…撫で回すみたいなのはやめ…はうっ⁉」
「くすぐったいのか？　女の子みたいな声出して――ふふっ、人のこと言えないぞ？　やっぱりゆーまの方がわたしよりずっとずっとエッチじゃないか」
リコーダーを持つように竿に指を添えて上下に扱きながら歩が勝ち誇る。手でするのは自慰で慣れているため彼女のぎこちない指使いは正直微妙なものだったが、

（歩っ、歩が俺のを扱いてる……歩が手コキしてくれてる――）
その事実だけで陰嚢の奥がキュンと疼き尿道をツンと針で突かれたような疼痛が突き抜ける。鈴口上には早くも透明な先走りがつぷっと楕円の雫を孕んだ。
「なんか出てきた……おしっこか？　それともこれが…せーえきっていうのか？」
オトコノコの生態に少女は興味津々らしい。鼻腔を膨らませ目を潤ませて、肉根をシコシコと扱く手はそのままに歩は勃起陰茎の先端を凝視してくる。
「いや、どっちでもないよ…気持ちいいと勝手に出るんだ」
「そうなんだ…すごいな、男の子のって」
感心したように頷きながら、少女は未だペニスを弄る手を止めない。そうしているうちに表面張力の限界を超えた先走りがつぅっ、と裏筋を流れた。
「あっ、うぁっ…んっ……き、気持ちいい……」
指先に絡んだ粘液が竿を弄る指を濡らし、その滑らかな感触に悠麻が喘ぎ声を漏らす。
「ヌルヌルしてるのがいいんだ？　そっか……じゃあもっと気持ちよくしてあげる」
彼の反応を見た歩は何かを決心したようにそう宣言すると、んあっ、と発声練習でもするみたいに大きく口を開く。そして次の瞬間、掌の中のペニスを一口で頬張ってみせた。
はむっ…んっ、ちゅっ、ちゅぷっ……！
「う…あ……熱い……!!」
思わず悲鳴にも似たそんな言葉が少年の口を突く。

（あっ、歩がフェラしてるっ⁉　シャワーも浴びてない俺のしゃぶってくれてる――‼）
生まれて初めて受けるフェラチオはまるでペニスを飴煮にでもされているかのよう。とにかく熱く、ぬるりとして柔らかく、腰が蕩けてしまいそうなくらい気持ちいい。
「ふふ…びくんっ、びくんっ、て一生懸命飛び跳ねちゃって……男のって怖いと思ってたけど…なんだか小さな生き物みたいで可愛いぞ」
んちゅぅっ…ちゅぷっ、ちゅぷっ、ちゅぅっ！
半ばまで悠麻を咥えた歩はキュッと口元を窄めると、ゆっくりと首を前後させながら唇でペニスを扱きだす。興奮のためか若干荒い鼻息が陰毛をくすぐりこそばゆい。
「うっ…あ……もっと、ゆっくり……」
情けない少年の呻きに少女はちゅぽんっ、と小気味よい音をたておしゃぶりを中断すると、
「ごめん、早すぎるの痛かった？」
性知識皆無の男装少女は心配そうに言いながら、自身の唾液にまみれて濡れ光る勃起をなだめるように撫でさすってくれる。
「いや…その、気持ちよすぎて……」
照れながらの悠麻の告白に歩は一瞬きょとん、としたものの、
「気持ちよくしてあげようとしてるんだからそれでいいんだろ？　ヘンな悠麻」
クスクスと微笑をこぼしながら掌の中の肉筒をゆるゆると扱き愛撫を再開させた。

更に歩は少年の股間へと顔を寄せ――。

ちゅっ…ちゅっ……ちゅぷっっ!!

摩擦にビクビクと踊る剛直にキスの雨を降らせ始めた。

「うっぁ……くぅっ」

位置的に敏感な裏筋へ集中放火を受けた悠麻は、激しい快感に身体を小刻みに震わせ身悶える。

「可愛い声出しちゃって。さてはココがいいんだな?」

チロチロチロっっ!!

熱に浮かされたような恍惚とした表情を浮かべながら、歩はイタズラっぽい台詞を口にしつつ再びペニスを咥え今度は舌を使って鈴口をくすぐりだす。

(うぁっ、歩のくち熱くって、舌もヌルヌルでっ……すごっき、気持ち…いいぃっ!!)

手コキもフェラチオも辛うじて知識として知ってはいたが実践は初めて――同じく初めての悠麻から見てもそうわかるくらい、歩の行為はかなりたどたどしい。しかしテクニックがない分、彼女の一生懸命さが痛いくらい伝わってくる。それはとりもなおさず歩の自分に対する強い想いに他ならない。

「……こっちも、触った方が嬉しいのか?」

しばし悠麻が喜悦に情けない声を上げていると、竿を扱いていた手がするりと下に滑り落ち、陰茎の真下でぶら下がる陰嚢に触れてきた。

「わぁ……本当にここ、玉みたいなのが二つあるんだな」
そこはペニスから垂れ落ちた彼女の唾液にドロドロになっており、指が袋の表面をヌルヌルと撫でただけで卑猥な刺激にキュンっと縮こまる。
「ひうっ…歩、ちょっストップ……!!」
ペニスへの刺激なら日頃の自慰である程度耐性はある。しかし陰嚢なんて普段風呂場で洗うときくらいしか触れたことがない。
ちょっと怖くなった悠麻は腰を引いて逃げようとするが、
「待てゆーまっ、さてはここが弱いんだな……ふふん♪」
彼の文字通りの急所を見つけた少女は腰を掴んで許さない。どころか得意げに鼻を鳴らしつつ、睾丸へ更なる刺激を続ける。
「ふふっぷにぷにで気持ちいいぞ、ゆーまのここ」
水面に浮かぶスーパーボールを掬い上げるように下から掌で包んで持ち上げ、五本の指をわらわらと蠢かしながら弄り回す。
「こら歩っ…なにし…てっ……」
「なにって……悠麻を喜ばせてやってるんじゃないか」
主導権を握った男装少女はにんまりと笑いながら片手で逃げる牡腰を取り押さえつつ、もう一方の手で精巣を按摩する。更に少女は予期せぬ場所への刺激に暴れ馬のようにビクンビクンと跳ね踊る肉筒へ桃色の唇を寄せると、三度はむっ、と咥え込んだ。

そこで悠麻はさっそくおもちゃそっちのけでサンタ姿の恋人（本物のプレゼント）の手を取り図々しくおねだり。

「よ、四つん這いっ⁉　……もうっ、悠麻は本当にお尻が好きなんだから」

呆れたように言いながらも、歩サンタは従順に命令に従いシーツの上に手と膝をつき尻を差し出してみせた。思った通り、口ぶりとは裏腹に嫌がる様子はない。

歩は確かに恥ずかしがり屋だが、同時にローターを所有しているようなむっつりＪＫ。

（俺に言われて仕方なしに、って流れならけっこー大胆になっちゃうんだよな歩って♥）

「おー、サンタさんケツでかいな！　こんなにおっきいと煙突にお尻がつっかえて大変じゃないか？」

目の前にでんっ！　と突き出された赤いスカート越しのヒップ、それを無遠慮にパシンと叩きながら悠麻が意地悪く笑う。

「よっ、余計なお世話だバカヤロウ‼　そんなこと言う悪い子にはプレゼントはなしなんだから――」

「まあまあ、それだけ魅力的なお尻だってことで」

ご機嫌を損ねそうなサンタ少女をなだめすかして四つん這いの姿勢を維持させる。

「それじゃサンタさん。まずはおパンツをば拝見させていただきますね――」

普段歩はトランクス。しかしこの格好でさすがにそれもないだろう。ならばいったいどんな下着を――そんな期待に胸を躍らせた悠麻は「ごっつぁんです」と勝利力士よろしく

手刀をきると目の前の桃尻へと手を伸ばす。
ぐっ。四つん這いの姿勢のおかげでヒップラインにぴっちりと張りついた布、その尻谷間のあたりに両の親指を差し入れ、桃の皮を剥ぐように上へと引き剥がせば。
ぷりんっ!!
引っかかっていた尻たぶのトップを越えた瞬間、赤い布地が一気にずり上がりサンタ少女の臀部が露出した。
「おお…縞パンとは。サンタ――貴様、わかっているな!!」
つるりと脱いだ下着は白に太い水色ストライプ。その的確なチョイスに少年はびしっ！と親指を立てる。アコガレの縞柄パンツ、太めのボーダー柄は恋人のムッチムチな肉付きを強調するようにカーブを描いており、悠麻のテンションはいやが上にも高まるばかりだ。
差し出された美臀の丸みを確かめるようにしばし円を描いて左右の尻房を撫で回したりその弾力と重みを確かめるように尻たぶの下弦を掌でたぷたぷと叩いたりして楽しんでいると、
「う、ホントに好きなのか……こーゆーのってロリコンとかが好むらしいぞ……？」
少年の縞パニストぶりを前に、若干軽蔑気味にのたまう縞パンサンタ。
「そんなことを言う性悪サンタにはおしおきが必要だな」
憤慨した悠麻はプレゼントの中から手錠を取り出すと、手早く少女の両手に嵌めてそれをベッドの端へと繋いでしまう。

「えっ、やだやだうそうそ！　ロリコンじゃない、ゆーまクンかっこいいっ!!」
囚われた歩は下手な褒め言葉で必死に挽回しようとしてくるが、元々嘘をつくのが下手な彼女のこと。却って馬鹿にされているようにしか聞こえない。
「今さら何を言ってもムダだ――おっ、これキョーミあったんだよなぁ♪」
歩サンタの腰を押さえ込んだ悠麻は数あるアダルトグッズからローションを取り出し突き上げられた臀部へ垂れ流す。
とろとろとろぉぉ……。
「ひゃうっ…つめたっ…うぅ……」
冬の冷気で冷やされた粘液を浴びせかけられた少女はキュンとお尻を窄ませ、艶やかな桃肌がサッと粟立った。
「冷たいのは最初だけだ。とぉってもヌルヌルで気持ちいいぞ？　それにエステ的な効果で小尻になるかも～？」
たっぷりと垂らしたローションを塗り広げるように、両手に余る豊臀を撫で回す。
「ほっ、ほんとうかっ⁉　んっ…これは確かに……気持ち、いい…かも……」
小尻、との言葉に反応し、歩サンタはおとなしく恋人の責めを受け入れる。喉を撫でられる子猫みたいに目を細め、少女はもっともっととせがむように小刻みに腰を前後させはしたないヒップダンスまで披露してくれる。
「ほら、もっと気持ちよくなれるように直に触ってやるよ」

ぎゅっ！

縞柄パンツをTバック状に絞り上げつつ、よりダイレクトに柔肌の感触を楽しむ。ヌルヌルとしたローションにまみれた歩のヒップは普段以上に艶やかで、剥き卵のようにつるんとしていた。指先に軽く力を込めるとむんにゃりと歪み、手に慣れ親しんだもちもちとした柔らかさとプリプリの弾力が悠麻を楽しませた。

（歩のお尻は春夏秋冬触り飽きることがないなぁ。このまま死ぬまで触ってたい……）

さりとて夜が明けるまで尻を撫で回し続ける、というわけにもいくまい。名残惜しいがせっかくのイブ、せっかくの従順ペットな歩サンタをもっとたくさん感じたい。

ようやく尻按摩をやめた悠麻だが、彼女のお尻はローションでぬちゃぬちゃ。まずはきれいにしないと――そう考えた悠麻はぐしょ濡れのショーツを柔肌から引き剥がすようにして脱がせ、ハンドタオルでローションまみれの桃尻を拭う。

「やぁっ…お尻拭いてもらう、なんてっ……ちっちゃい子みたいでっ、恥ずかしい……!!」

桃谷間にまで入り込んだ粘液を拭き取ろうと尻房を割り開き肛門付近を拭ってやると歩が呻くように恥じらう。

「あ、まだ恥ずかしいんだ？」

「あたり前だっ」

振り向いたサンタ少女の頬はコスチュームくらい真っ赤に染まっている。

「でも気持ちいいんだよね？」
そう言いながら指先で菊座をツンっと軽くつつくと、美肛はイソギンチャクみたいにキュンッと硬く窄まってみせた。過剰なまでの引き締めにぷくっと膨れた肛門へ指を添え、コリをほぐすような指圧で放射皺の外側からじっくりと括約筋全体をマッサージ。するとあれだけ頑なに思われた鉄の肛門は炙った飴みたいにぐにゃりと柔らかくほどけだし、肉菊は綻ぶようにして内側の鮮やかなピンクをした直腸壁まで覗かせた。
「いやいや言ってる割にはちょっと弄られただけでコレか……まったく、エロすぎだぞ歩のカラダは」
いともたやすくサカってしまう牝肛に苦笑する悠麻。初めてのアナルセックス以来三回に一回はお尻エッチを敢行していた悠麻だが、それというのもひとえに歩のお尻が感じやすいからに他ならない。下手をすれば前の穴でするときより声が濡れてしまうのだ。
「あっ、歩じゃなくてサンタクロースだっ!!」
肛悦に紅潮した頬をだらしなく弛緩させながらも、少女は頑としてそう反論。
「その設定まだ生きてたのか……っていうか歩、もしお前が別人の〝サンタさん〟だとしてだ。そのサンタさんと俺がこーゆーことしても歩は構わないわけ？」
「え？　悠麻がわたし以外の子、と……だっ、そんなの絶対ダメだ!!」
恋人の問いに一瞬想像力を巡らせた少女はすぐさま血相を変えてそう叫ぶ。根が真面目な歩のこと、たとえ想像の中だとしても浮気なんてあってはならないことなのだろう。

「そうか――じゃあもうやめないとだな。俺には歩という大切な恋人がいるんだし」
純情すぎるくらい純情な彼女の言葉に嬉しくなりながら、やっぱり意地悪したくって。
少年はわざとらしくそう言いながら肛門を弄る手を退いた。
「えっ……そ、そんなぁぁ……!!」
するとそれまで散々嫌がる素振りを見せていたくせに、歩は物欲しげな表情で振り返る。
その美肛も愛撫の再開をねだるようにひゅくひゅくんっと小さく収縮を繰り返していた。
「だって浮気はだめだろ？」
「そうだけど……そうじゃないだろぉっ……!!」
もちろん歩だって悠麻が本当に自分をサンタだと思っているわけがないことくらい知っているはずだ。
（おそらくこれは〝普段は内気なクラスのあの子がコミケではっちゃけ大胆コスプレの法則〟だな）
いつもは受け身の歩、他人を演じることで積極的になろうとでもしたのだろう。
「う～っ、わかってるくせにっ……サンタはわたしだろっ、ゆーまのいじわるっっ!!」
悠麻の焦らし責めに耐えきれず身を起こそうとする歩だが、手錠のおかげで中腰が関の山。足腰を鍛えるストレッチのような、よりはしたないポージングでお尻を突き出す羽目となる。
「おー、いい格好だな。お尻の孔がヒクヒクしてて、お腹の中まで丸見えだぞ」

「いっ、いやあああっ!?」
悠麻の感想にすぐさま腰を落として排泄孔を視界から隠そうとした歩だったが、少年は豊臀を掬い上げるように抱えそれを許さない。
「今さら恥ずかしがることないだろ……よし、ならば今度はこれを試してみようかな」
次に少年が手にしたのは真珠のネックレスを巨大化させたような数珠状の淫具だ。
「なっ、なんなのそれぇっ……?」
またも未知の道具に歩が心配そうに呻く。そんな恋人を尻目に悠麻は数珠玉へ付属のワセリンをたっぷり塗り込むと、
「ほら、お尻の力抜いて」
ぐにゅぃっ——言いながらアナルビーズの端を菊座に押し当てる。
「やだっ、お尻に入れるのっ!? そ、そんな大きいの入んないよっ……!!」
彼の手にしたおもちゃが肛門責めの淫具と知って、歩サンタは肛口を固く結びほどこうとしない。
「心配するな、俺のが入ったんだからこれくらい余裕だろ。それに問題は入るか入らないかじゃなく入れるか入れないか。そしてその答えは——前者だっ!!」
ぐにゅいっ!! 悠麻が指先へと一気に力を込める。
「んふあわあぁぁぁ————っっっ!?」
限界まで抵抗があった直後、肛口はちゅるんっと数珠玉を飲み込んだ。

「どんな感じ？　痛くない？」
なんだかんだ言いながらもやっぱり本来モノを入れる場所ではない。彼女の上げた悲鳴に心配になってそう問えば、
「んぁぉっ……ぅぅ…へ、いき……だけどっ…ヘンなかんじィっ……」
途切れ途切れの言葉ながら苦痛を感じている様子はない。
「そっか。辛かったらちゃんと言えよ？　ほら、こっちも弄ってやるから――」
少女の意識を分散させるべく、尻を抱える指で陰唇をくちゅくちゅと弄ってやる。
「あっ♥　ひゃぅんっっ…んっ、そこっそこ好きぃっ♥」
前への刺激は効果覿面。歩は鼻にかかったような甘い声を漏らし、気持ちよさそうに巨尻をふりふりと上下させだした。
「ほら二つ目」
ぐにゅちゅぅぅ！
女陰への刺激に弛緩したのを見計らい、少年はすかさず二個目のボールを直腸内へと押し込んでしまう。
「かっはぁぁっ⁉　だっ…もう入れないでっ……⁉」
「我慢しないと気持ちいいのも止めちゃうぞ？　ここ――触って欲しいんだろ？」
言って悠麻は肉の泉に泳がせていた指先を伸ばし、岸でぴょこんと芽を出している肉突起をこつんと小突く。

「あひぃっ⁉　さっ触って…いつもみたいにいっぱい揉んでっくにくにしてぇっ‼」
自慰ですっかり淫らに育った肉芽は彼女一番の性感帯だ。エッチの際も特に重点的に愛撫してやるホットスポットだが、それゆえにココに対する焦らし責めに歩はひどく弱い。それに両手に手錠をかけられている以上、歩は自分で自分を慰めることもできない。
「全部お尻に入れられたらいっぱいクリ弄ってやるよ」
「そっ、そんなあぁぁ……」
泣き言じみた言葉を吐きながら、しかし歩はそれまでのように肛虐から逃げ惑う素振りをやめおとなしく美肛をこちらへと差し出す。
「わかりやすいヤツ……ほら三つ目」
「うぉぁっ…ひゃ…だぁ、ぁ……っ」
「四つ目」
「くひっ…ひっ…いぃぃ……‼」
「五つ」
「んおっ…おなかっ、ゴツゴツ当たってぇっ……ふひっ、ひぃぃ……‼」
「もう一個」
「ひんっおしっ、お尻っ…わたしのおし、り…がぁぁ……⁉」
口調はずっと拒絶の意志を崩さないものの、直腸に送り込まれるビーズの数が増えるに従い、徐々に歩の声が蕩けてゆくのがわかる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

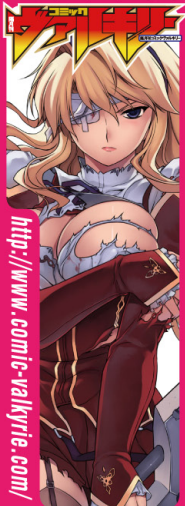
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！